

第2章 吉田構内水銀灯新営に伴う発掘調査

1 調査の経過

本部1号館および大学会館前庭南側を東西に貫通する構内循環道路に、視覚障害者用の点字ブロックの新営が計画された。点字ブロックの新営に伴う工事は、現地表面からわずか18cmの掘削であったため、直接、埋蔵文化財に影響をおよぼす規模ではなかったため、調査対象から除外した。しかし、付随工事として、循環道路に沿った歩道部分3ヶ所に水銀灯の新設が予定されていたため、工事規模および過去の調査結果を勘案して、立会調査を実施した。

その結果、本部1号館の南西部分および大学会館前庭の南西部分の計2ヶ所で遺物包含層が検出された。調査結果をうけて関係部局と協議の結果、工事の性格上、掘削規模および設置地点の変更が困難なことから、新設地点について事前に発掘調査を実施することとなった。

調査は電気ケーブルの埋設地点2ヶ所について実施し、本部1号館の南西に位置する2m×1mの調査区をA区、大学会館前庭部の南西に位置する1.5m×1.3mの調査区をB区と呼称した。調査期間は平成元年6月10日から12日までで、調査面積は約4㎡である。構内造成による埋め土は重機を使用して排除し、以下は手掘りによる分層発掘を行った。

2 層位 (Fig. 4, PL. 3(2))

A区

南東隅は攪乱によって消失している。現地表面の標高は約19.10mで、構内造成時の埋め土が厚さ約90cmにわたって客土されている。その直下には、オリーブ黒色土の遺物包含層が堆積しており、須恵器1点出土した。層厚は約5~15cmで、東側に厚く堆積している。旧耕作土・床土は認められない。遺物包含層の下位は黄褐色粘土の地山で、調査区の東端部で柱穴および5世紀代の溝状遺構を検出した。

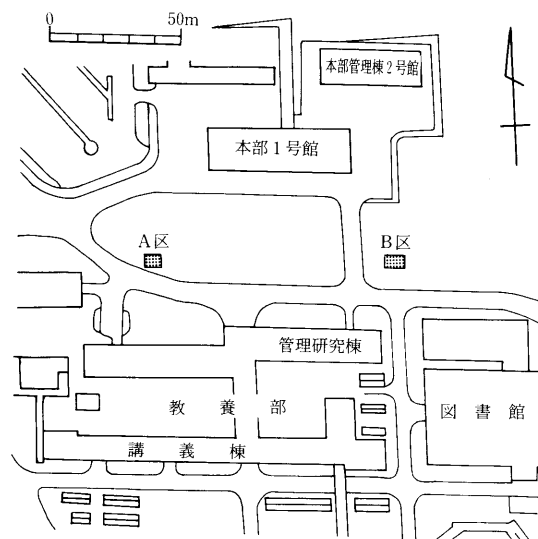


Fig. 3 調査区位置図

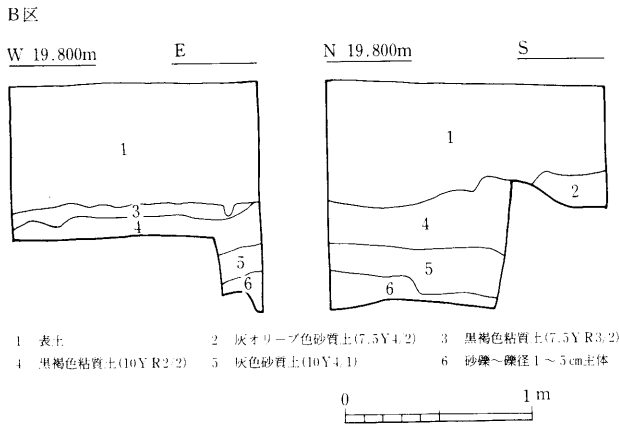
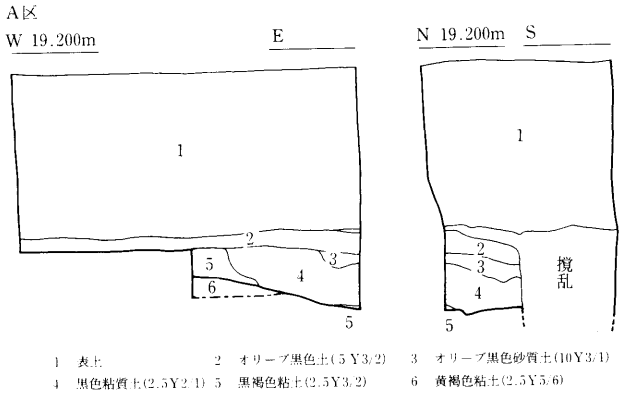


Fig. 4 土層断面実測図

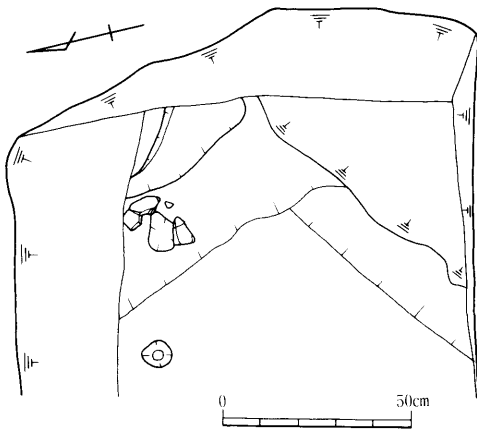


Fig. 5 溝状遺構実測図

B区

A区の東方、約65mに位置する。現地表面の標高は約19.70mで、構内造成時の埋め土は東側で約45cm、西側で約65cmの厚さにわたって客土されている。A区同様、旧耕作土・床土は認められない。

埋め土の直下には、3層にわたって遺物包含層が堆積する。

最上層は、層厚約5～10cmの第3層：黒褐色粘質土(Hue7.5YR3/2)で、東端部には堆積していない。弥生土器、土師器、須恵器を包含する。その下位には、弥生土器、土師器、須恵器、歴史時代土師器、六連式製塩土器を包含する第4層：黒褐色粘質土(Hue10YR2/2)が堆積する。層厚は平均約20cm、最大約40cmで、他の2層の包含層に比べて、遺物の包含量が多い。南東隅では、同層を掘り込んだ灰オリーブ色砂質土の充填した土壌が検出された。南への延長部分は調査区外におよぶため完掘しておらず、また、出土遺物もないため、規模、時期等ははっきりしない。最下層は、弥生土器、須恵器等を若干含む第5層：灰色砂質土である。層厚は平均約15cm、最大約25cmで、植物遺体を含む。遺物包含層の下位は、無遺物層である砂礫を介在

遺構・遺物

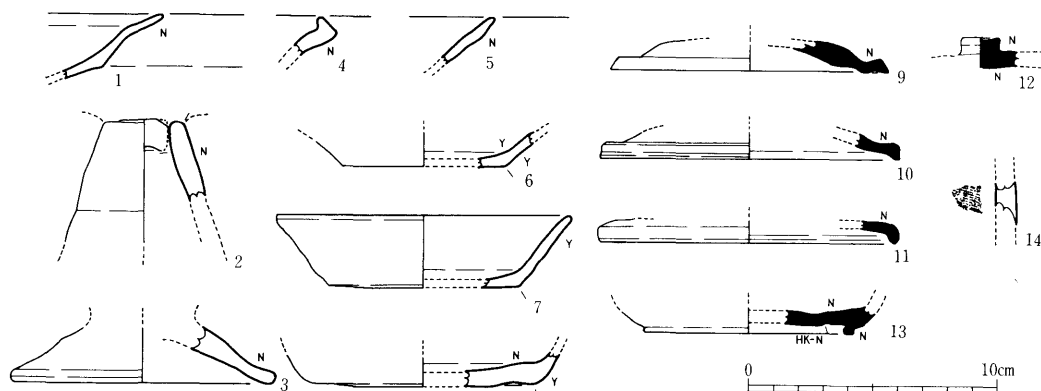


Fig. 6 出土遺物実測図

して、黄色粘土の地山となる。

なお、表土中から弥生土器、土師器、須恵器数点が出土した。

3 遺構

溝状遺構 (Fig. 5, PL. 2)

A区の東端部で検出したが、東への延長部分は調査区外にあたるため完掘しておらず、規模は明かでない。攪乱によって南半部を消失している。検出面の標高は約 18.15m で、中央部で屈曲して走行しており、2基の遺構が重複している可能性がある。深さは溝底と思われる北東部で 27 cm である。埋積土は、上層がオリブ黒色砂質土 (Hue10Y3/1)、下層が黒色粘質土 (Hue2.5Y2/1) である。

遺物は、下層を中心に土師器高坏・台付碗などが出土したが、量的には多くはない。5世紀代。

柱穴

溝状遺構のすぐ西側で検出した。上面径約 7 cm、深さは 2 cm を残すにすぎない。埋積土は黒色粘質土 (Hue2.5Y2/1) で、溝状遺構の下層と同色調である。

出土遺物はない。

4 出土遺物 (Fig. 6, PL. 3(3))

1～3はA区の溝状遺構出土の土師器。1・2は高坏。1は浅い坏部が弱く反転し、口縁部はさらに「く」の字に屈曲して外湾ぎみに開く。口縁端部は尖る。2は円盤充填法の脚柱部で、外方への開きがやや大きい。3は台付碗の脚台部で、器壁が厚く、成形は極めて粗雑に行われている。

4～14はB区の遺物包含層出土のもので、弥生土器、土師器、須恵器、歴史時代土師

器、六連式製塩土器などがある。

4は跳ね上げ口縁をもつ弥生土器の甕。5～8は歴史時代土師器。5～7は皿。5は極めて粗雑な調整による口縁部で、端部は尖りぎみに終わる。6・7は底部と体部の境が明瞭で、7は直線的に立ち上がる体部から、口縁部は内面の強い横ナデによって、外反ぎみに開く。8は坏。底部と体部の境は極めて不明瞭で、体部は内弯して立ち上がる。5～8とも風化著しいが、7の器形・法量からみて糸切り底であろう。9～13は須恵器の坏。9～12は坏蓋。口縁部が鳥嘴状を呈し、口縁部付近で水平に近く開き、接地点が口縁端部とその内側にあるもの(9)、体部から口縁部にそのままゆるやかに移行し、口縁端部で接地するもの(10)や口縁部が外弯して短く下降するもの(11)などがある。12は撮み部で、上面はわずかに窪む。13は高台を有する坏身。底部と体部の境にいびつな高台を貼付する。外底面はヘラ切りののち、軽くナデている。14は六連式製塩土器の胴部。小破片のため、外面の調整がわかりにくい、指頭による成形ののちナデているものと思われる。タキの有無は不明。内面には極細の布目痕が明瞭に残る。胎土には粗い砂粒を多く含む。二次的な加熱痕はみられない。

6は第3層、5・7～14は第4層、4は第5層出土。

5 小結

A区周辺は、その北東に位置する本部1号館敷地および大学会館前庭部に比べて約2.5～3m低くなっている。本部1号館敷地の南西部分ではこれまで散発的な立会調査を行っているが得られる知見に乏しく、調査前には、統合移転に伴う造成工事によってすでに大規模に削平を受け、遺物包含層、遺構が消失した地域であろうと想定されていた。しかし、今回、溝状遺構、柱穴などの遺構を検出したことによって、集落関連遺構が残存していることが明かとなった。

北東から南西に延びる丘陵の頂部付近に立地する、本部1号館敷地や第二学生食堂敷地などでは、過去の調査で4～5世紀代の竪穴住居跡が十数棟検出されている¹⁾。A区で検出した溝状遺構、柱穴は、これらの竪穴住居跡群とほぼ同時期で、一連の集落を構成しているものと考えられ、当該期の集落の分布範囲がさらに西側に広がっていることを示唆している。

遺物包含層はA・B両区で検出した。A区では、出土量は極めて少量であったが、B区では、3層にわたって堆積する遺物包含層から比較的多量の遺物が出土した。各層とも、弥生時代から平安時代にかけての遺物が混在しており、単一時期の遺物によって構成され

小 結

Tab. 2 出土遺物観察表

法量()は復原値

番号	器 種	法 量 (cm) (①口径②底径③器高)	色 調 (①外面 ②内面)	胎 土	焼 成	備 考
A区						
1	土師器 高坏		にぶい黄橙色 (10YR7/4)	良 好	やや不良	
2	土師器 高坏		にぶい黄橙色 (10YR7/4)	良 好	不 良	
3	土師器 埴	②(10.4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	良 好	やや不良	
B区						
4	弥生土器 甕		灰白色 (2.5Y8/2)	良 好	良 好	跳ね上げ口縁
5	土師器 皿		灰白色 (5Y7/1)	不 良	不 良	
6	土師器 皿	②(6.6)	淡黄色 (2.5Y8/3)	不 良	不 良	
7	土師器 皿	①(11.9) ②(7.7) ③2.9	灰白色 (2.5Y8/2)	不 良	不 良	
8	土師器 坏	②(9.0)	①淡黄色 (2.5Y8/3) ②橙色 (2.5YR7/6)	不 良	不 良	
9	須恵器 坏蓋	②(11.2)	①青灰色 (5B6/1) ②暗青灰色 (5B4/1)	良 好	良 好	
10	須恵器 坏蓋	②(12.1)	青灰色 (10BG5/1)	良 好	良 好	
11	須恵器 坏蓋	②(11.9)	①灰白色 (N7/0) ②暗青灰色 (10BG3/1)	良 好	やや不良	
12	須恵器 坏蓋		青灰色 (5BG6/1)	良 好	良 好	
13	須恵器 坏身	②(8.4)	青灰色 (5B6/1)	良 好	良 好	
14	六連式製塩土器		淡黄色 (2.5Y8/3)	良 好	良 好	

ていない。同様な色調・遺物組成をもつ遺物包含層は、B区の北側に位置する大学会館前庭部分²⁾、および南側に位置する附属図書館敷地でも検出されており、一連の遺物包含層として捉えられる。附属図書館敷地の南側の地域での調査は進展していないが、大学会館前庭部分から教養部敷地にいたる周辺一帯に遺物包含層が広範囲に分布していることが予想される。

遺物のうち、第4層：黒褐色粘質土から出土した六連式製塩土器は、構内遺跡はもとより榎野川流域の内陸部でははじめての出土例で注目される。第4層の主体を占める遺物は8～9世紀のもので、本学南縁を巡る家畜病院周辺の市道でも、同時期と考えられる細かい布目をもつ1例の六連式製塩土器の出土例がある³⁾。構内遺跡では今回の調査地点の北側に位置する大学会館敷地で、墨書のある須恵器、緑釉陶器、木簡、円面硯、石鏝など古代の政治勢力の存在を想定させる遺物が出土している⁴⁾。六連式製塩土器の出土は予想される政治機構の存在と決して無縁ではないと考えられ、古代における土器製塩、塩の需要・供給関係、流通経路を解明する上で貴重な資料となった。(河村)

吉田構内水銀灯新営に伴う発掘調査

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「山口大学構内吉田遺跡の概略」(『山口大学構内遺跡調査研究年報 I』、1982年)。
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報 V』、1986年)。
- 3) 山口大学埋蔵文化財資料館「中央図書館増築予定地M-16区 of 発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報 II』、1985年)。
- 4) 山口大学埋蔵文化財資料館「市道神郷1号線および問田神郷線の送水管埋設に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』、1987年)。
- 5) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報 III』、1985年)。

吉田構内水銀灯新営に伴う発掘調査
(1)



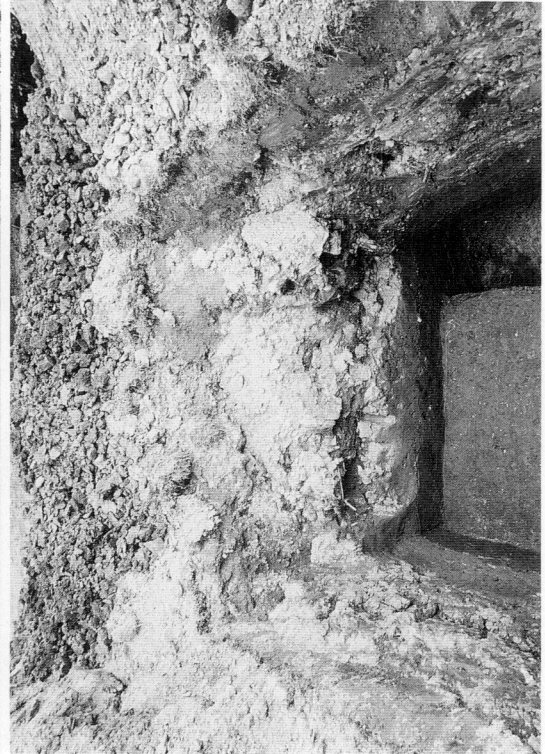
(1) A区溝状遺構遺物出土状況(西から)



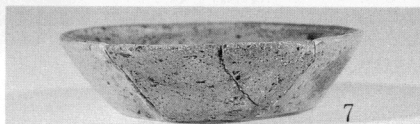
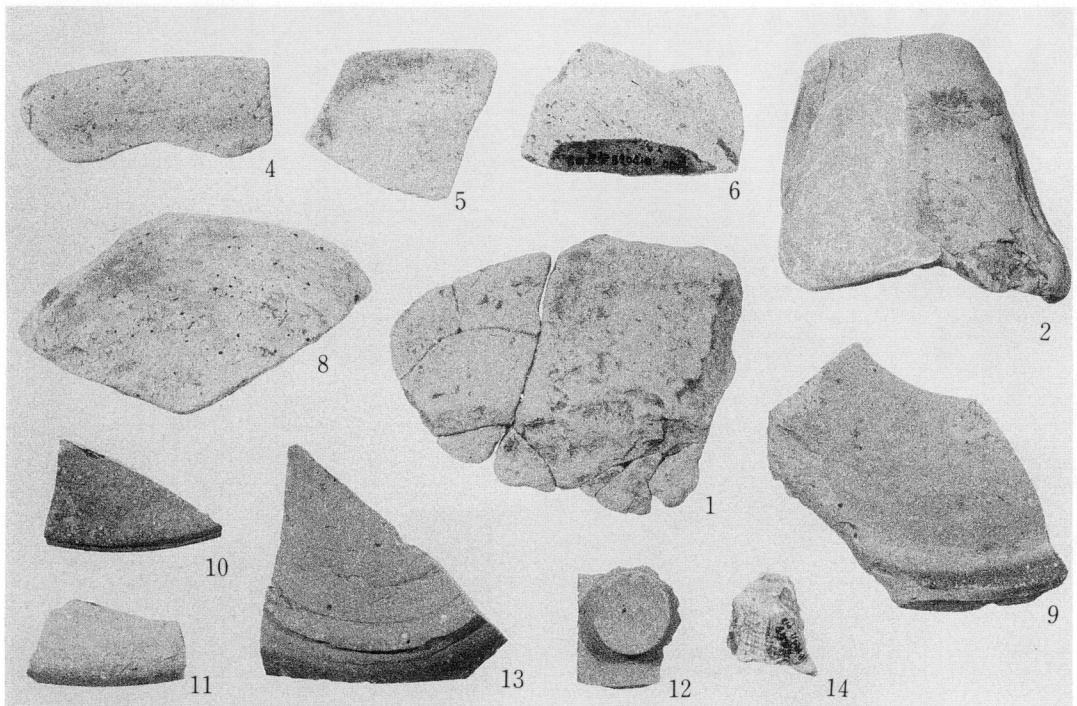
(2) A区溝状遺構(西から)



(1) B区土壌(西から)



(2) B区北壁土層断面(南から)



(3) 出土遺物
3・7…約1 : 3
その他…約2 : 3